
シュークリーム殺人？

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショークリーム殺人？

【NZコード】

NZ500R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

オモシロ料理実験サークル、通称オモケン（非公式）でショーケリームがなくなつた。疑いあり、たつた4人の部員の友情が危うくなる。誰が食べたのか。そして誰が残りのショーケリームを食べられるのか。

(前書き)

初めて推理ものに挑戦してみました。

私、本田縁が部室である料理準備室に入つたとき、部室にはすでに部長の前原陽子と杉良太がいた。食器棚に囲まれた狭い部屋の真ん中に置かれた机を囲むように、椅子が並べてある。一番奥の偉そうな席に偉そうに足を組んで陽子が座り、横に椅子を5つ並べて杉が陽子より偉そうに寝転がっている。陽子の後ろのホワイトボードには私の字で「ねるねるねるね」と書いてある。

陽子は私を見、見ていたケータイから顔をあげて「よつ」と言う。陽子のケータイは相変わらずドリンクで派手だ。ウサギのシッポストラップが揺れている。杉に関してはうつ伏せに寝たまま、チラともこっちを見ない。私は杉の向いに座った。

「今日もねるねるねるね？」

と陽子に聞く。「そう」と陽子が短く返事をする。

私達は料理部に所属している。部員は一年から二年まで55人。週に一回の活動。大所帯で自由が無いのであまり居心地は良くない。そこで陽子が発足させたのが「オモシロ料理実験サークル」通称オモケン（非公式）。部活がない放課後に集まり、火を使わない料理をしている。部員は全員二年で四人。陽子、杉、私、そして今日はまだ来ていない、料理部次期部長の青木みかん。最近のサークルの研究は「ねるねるねるねの一番美味しい食べ方」。今のところ一番の有力は水の代わりにカルピス（原液）を混ぜる。今日はお茶類で試してみる予定らしい。

私は杉に聞いた。

「杉くん、お茶買ってきてた？」

杉はうううっとこもつた声で呻き「冷蔵庫」と一言だけ答える。

冷蔵庫は調理準備室の隣の調理室にあり、調理室に行くには廊下からそのまま入るが、準備室と調理室をつなぐ扉から行くことがで

きる。しかしオモケンは非公式の集まりのため、火元の恐れのある調理室の鍵は、理由がないと貸してもらえない。だから杉は準備室から調理室へ入ったのだろう。

私は先週までのオモケンの研究ノートをめぐり、我ながらテキト一な活動だなあと感心する。部員が全員集まらないと研究は始めないルールなので、ミカンが来るのを三人で待つ。途中私は筆箱を教室に忘れたことに気がつき、教室に戻った。部室に帰ってきても杉が寝返りしていたほかは、出て行つたときと変わらなかつた。

「「「めんね」。日誌書いて遅れた！」

間も無くしてそう言いながらミカンが部室に入つてきた。軽やかに動くミカンはフワフワと短い髪をゆらした。杉が体をのつそりと起こし、陽子がケータイをしまう。私も研究ノートを閉じた。

「そうだ、今日はみんなにお土産があるんだ！」

ミカンがそう言つてにこやかに隣の調理室に入つていつた。

「え、なになに？？」

陽子がワクワクと顔を輝かせる。

「昨日、ちょっと東京行つてきたんだけど、有名なシュークリーム買つてきたの」

ミカンが大事そうに持つてきた箱には、有名なケーキ屋さんの名前が印字されていた。

「わっ！！ 昨日TVで見たやつだ！！」

陽子が声をあげる。

「ありがとー！」

「おー、でかした青木みかん！」

私と杉もそれぞれ感動する。ミカンはお店でどれだけ並んだか説明し、また登校している間に少し崩れちゃつたことを詫びた。「食べよ食べよ」と陽子が我先に箱を開ける。

「アレ？ 三つしかないよ」

陽子が開けた箱には大きくまん丸なシュークリームが三つしかなか

つた。

「え？ 私ちやんと4つ買つたよ？」

「ミカンじゅー」と、陽子に聞かれたミカンは不思議そうに首をかしげた。部員は四名。シュークリームは三つ。

「消えちゃつたつてこと？」

私は誰に言つでもなく言つた。

「ホントに四つ買つたのかよ？」

杉がミカンに聞く。ミカンは「か、買つたよ。絶対！」と言つて鞄を「こそ」そと探し、財布からレシートを出した。確かにレシートには四つ買つてあつた。しかし私は別のことに驚いていた。シュークリーム、高っ！ 小さいケーキが買えそうな値段だ。

「あ、値段のことは気にしないでね」

ミカンはそう言つが、一瞬場が固まつてしまつた。「あ、じゃあ、良太でしょ！」と取り繕つように陽子が言つ。

「何？ 僕が食つたつて言つのかよ？」

杉が驚いたように言つた。

「だつて良太、お茶を冷蔵庫にしまいに行つたでしょ。そのときにはシュークリームを見つけてたんぢゃないの？」

陽子は杉に指を突きつけ、「犯人は、お前か！」と叫ぶ。

「俺じゃねーよ！」

杉は思い切り眉を寄せ、変な顔を作つた。

「だいたいお前も見てただる。俺は冷蔵庫にお茶入れて、すぐ部室に戻つたつて。」

「私は冷蔵庫に良太がお茶を入れるとこは見てなかつたもん。ここでケータイでふよふよしてた」

陽子は自分の後ろに置いてあるホワイトボードに「ふよふよ」と書いた。

「すぐ戻つたから食う時間なんてなかつた」

杉が陽子の書いた「ふよふよ」の文字を消し、「無実！」と書いた。
「よつしゃ、犯人探しだ！！」

取り合えず、私は書記を頼まれた。オモケンの研究ノートも私が作っている。私が書記をやるのは流れ、というか当たり前か。ホワイトボードの方に「シュークリーム消失事件」と書く。
「シュークリーム窃盗事件のほうが正しくないか」と杉からヤジが飛ぶ。

「窃盗なんて難しい漢字、書けませーん」

「この場合、戻つてこないものだから窃盗より消滅じゃない？」
ミカンがもつともらしいことを言うが、「滅」の漢字もアヤシイ私は何も言えない。ミカンが指で空に大きく書いてくれるが、残念、分からぬ。私が杉にバカバカ言われ、「杉くんの方が成績悪いじやん」と言い返していると、陽子が唐突に手をあげて言った。

「はい！ シュークリーム殺人事件がいいと思います！」

続けて「シュークリームは誰かに食べられ、死にました。ううつ」と陽子は泣きまねます。

殺人なら漢字で書ける。私は微妙に反対意見もある中、最初に書いた「消失」の文字を消し「殺人」と書いた。

「シュークリーム殺人事件」

- ・シュークリームは4つあった 1つ消え3つに
- ・生存の可能性 低い
- ・杉良太 シュークリームを三秒で食べられるのか

ここまで書いて私たちは詰まってしまった。ちなみに一番下の項目は、杉がお茶を冷蔵庫にしまいに行っている間の僅かな時間で、シュークリームを食べられるのかということ。

「ところで、俺が来るまで陽子は部室に一人だつたんだろ」

杉くんが陽子に聞く。「そ。鍵開けたのアタシ」と陽子が言つ。

「どうやら陽子が最初に部室に来たらしい。

「じゃあ、犯人はお前だ」

「は？ 違うから！！」

私は四つ目の項目に

・前原良子 一番最初に部室へ入る
と書き足した。

「なら、ミドリが教室に戻ったときもあつたじゃん。ミドリもアリバイないじやん」と陽子が言つ。

「あ、お前が食つたのか？」と杉。

「食べてないし、無理でしょ。調理室鍵掛かってるし」私は冷静に返す。

「そつか。あつでも、鍵借りに行つたとか」

ミカンが言つたその一言で、私達4人は一同職員室に向うことになつた。

調理室の鍵は、料理部の顧問タエコ先生が持つている。

タエコ先生は「朝シユークリームを冷蔵庫にしまうためについて青木さんに貸しただけで、調理室の鍵を他には誰にも貸してないわ」と言つた。私の無実は証明された。

タエコ先生は、職員室の中をキヨロキヨロ見ていた杉に「誰先生？ 呼ぼうか？」と声を掛けていたが、杉は「いえ」と一言断つていた。

「職員室で誰探してたの？」と部室までの帰り道、杉に聞いたら「担任。いたらヤダナーツて」と言つていた。

「どうやらここまで容疑者は一人。前原陽子と杉良太。一人ともアリバイがない。しかしどちらが犯人なのかは分からない。

「ねるねるねるね」ビリではなくなってしまった。部屋の中に漂う空気はドローンと暗く、容疑者はふたりとも拗ねて一言も発しなくなってしまった。

ついに空気に耐えられなくなり、私が
「シュークリームは置いといて、ねるねるねるね の研究しようよ
！」

と部室の隅の食器棚に隠してあった ねるねるねるね を出した。最初は10個ほどあつた残りがあと三つだけになっていた。しんと静まり返った部屋の中で一人 ねるねるねるね を練る。杉が自販で買ってきたウーロン茶で作った ねるねるねるね ブドウ味は少し色が汚かった。

一人黙々と練つていると寂しさが込み上ってきた。どうして誰も声を発しないんだ。「色は悪いかな」「練つた感じはフツーかな」と一人で喋つていて、私がバカみたいじゃないか。

寂しさと、怒りと、変に食べるのに勇氣のいる物体を田の前にした情けなさで、ねるねるねるね がぼやけて見えてきた。そのとき「毒見役は俺だつた！」

とこれまで机に突つ伏していたはずの杉が、横から ねるねるねるね を自分の方に引き寄せた。私は杉の顔を思わず見つめてしまった。「なんだよ」と不機嫌そうに杉が言う。

「なんでこんなときに ねるねる 練つてんの？」
と陽子もあきれたように笑つている。

「何し始めんのかつて、びっくりしちゃつた」ミカンがケラケラと笑つた。

アヤシイ色の ねるねるねるね をいつの間にか食べたらしい杉
が言つ。

「あ、大丈夫かも……。あ、やっぱダメだ」

杉は手で大きくバツ印を作つた。どんな？ 私が聞くと「後味が苦

い」顔をしかめる。

私はそのまま、いつものように研究ノートに杉の言葉を書いた。杉が「おいしい」と言つたら私達は食べてみるし「不味い」と言つたら食べない。いつものように。

「今日は、後はリプトンのピーチティーと紅茶家伝のミルクティーで作るんでしょう」

陽子が私のノートを覗き込みながら聞く。

「うん。ねるねるねるね実験はそれで終わり」

まだまだオモケンはなくならない。ショークリーム如きで、私は最悪の事態まで想像していたようだ。良かった。

ショークリームが一つ消えたことは置いといて、今日の実験、ひいては「ねるねるねるね」の実験は終了した。結果はお茶類はナシ。柑橘系もなし。甘い飲み物で作ると甘さが増える。

実験ノートの最後に杉が「はじめからそんなにおいしいものではなかつた」と油性ペンで書き足した。陽子はそれを見てギャンギャン反論した。

ふうっと一息ついたあとでミカンが言つた。手にはショークリームの箱。ねるねるねるねで実験している間は、冷蔵庫にしまってあつた箱を出してきたらしい。

「ショークリームを誰が食べるかはくじで決めよ」

ほらつと手にしていたのは、割り箸二膳分四本。

「一本だけ赤い印がついてるから、それを引いた人は食べれないってことで」

ミカンは右手に持つたマーカーをブラブラと揺らして強調させる。

「私は、みんなは絶対に嘘ついてないって信じてる」

恥ずかしげも無く、真剣な顔でミカンがそんなこと言つから、私は何だか感動してしまった。いつもは五月蠅い杉も陽子も黙っているつてことは、多分一人も感動してるんだね」

「ミカン！ そうだよね。私達の中に犯人なんていないんだよ！」

陽子はミカンに抱きついた。私はホワイトボードに書いてあつた何もかもを、まっさらになした。

「誰が引いても恨みつこナシで……」

杉の掛け声で私は割り箸の一つを選ぶ。杉と陽子も選び「いつせーの一せー！」で三人同時に引いた。

結局、三本の中に赤い印の割り箸はなかつた。

「えー！！ 私！？」

とミカンが泣きそうな声を出す。でもその顔は声とは裏腹に楽しそうだつた。私と陽子は合わせてもないのに、同時に「半分こしよ」と半分にちぎつたショークリームをミカンに差し出していた。

「え、何、そんな感じなの？」

一口でショークリームを平らげていた杉は、「出そうか？」と吐く真似をして、陽子に殴られた。

ミカンと半分こにし、オモケンのみんなで食べたショークリームは素晴しく美味しかつた。

ねるねるねるね の残つたウーロン茶を飲みながら、みんなで次の実験の内容を話し合つた。

しかし私は他のことを考えていた。ノートに書かれた杉の汚い字。
『はじめからそんなにおいしいものではなかつた』

はじめから。もしかしたらショークリームは、初めから一つ足りなかつたんじゃないだろうか。買ったときは4つだつた。しかし部室の冷蔵庫にしまうまでに一つ食べた。誰が。ミカンが。

いやいやいやと私は頭を振つて考えを払つ。ミカンは自分は食べてないと言つていた。クジでハズレを引き、食べられなかつたときあんなにガッカリしていただじやないか。

違う。ミカンはクジを引かなかつた。あのクジに本当にハズレは

あつたのか。

自分がわざとハズレを引く理由。それは何か後ろめたいことがあつたんじゃないか。

ミカン。私はミカンが嘘ついていないと信じたい。信じたいけど……。

「あのー

私はおそるおそる手を上げた。三人の目線が私に刺さる。でも、分かつちやつたからには黙つてもおけない。

「シュークリーム殺人事件の犯人。分かったかも……」

私はみんなの前で自分の推理を披露した。

「ね。疑いたくないけど、ミカンのクジがハズレじゃなかつたら……」

おずおずと言つ私の言葉は消えちゃいそうに小さい。本当は私だつてこんなこと言いたくないのだ。

ミカンはハーと長い溜め息をついて、割り箸を見せた。そこには書いてあるじやん。赤丸

杉が言つたように印はついていた。

「疑つなんて、酷いよ」

陽子は私に言つた。私の心臓はひつひと音を立てて凍つた。私、間違えてた。

「あーしようがないよ。割り箸見せなかつた私が悪いから」

ミカンは手を振つて、笑つて許してくれた。私は杉に「お前バカだなー」と言われた。

「私は絶対、嘘なんかついてないからね」

ミカンは私にそういつた。私は「ゴメンゴメンホントー」「ゴメンー！」とひたすら繰り返した。

帰り道。電車通学の私と杉は、途中で陽子とミカンと別れて二人

で歩いていた。最初オモケンを発足させたとき、仲の良かつた私と陽子とミカンの三人だつた。料理部の幽霊部員と化した杉に、気を遣つて声を掛けたのは同じクラスの私だつた。まさか本当に入つてくるとは思わなくて、自業自得と言えど帰り道がひたすら気まずかつた。明るい性格の陽子と、自由人だけどしつかりしてゐるミカンのおかげで、杉がオモケンにすっかり馴染んだ今は、違う氣まずさだ。駅までの帰り道、私は自分の失敗を恥、何故か杉に謝つていた。

「ホント、バカでごめん。また空氣悪くしちゃって……」

「何回言つてんだよ。もういいつて。ミカンも陽子も、お前の頭の悪さはちゃんと知つてるから平氣だつて」

「でも。穴があつたら入りたい……」

「ハー、しょうがねえなー。杉が面倒くさそうにそっぽを向く。私も目線を追つて杉の見るものを見ようとしたが、民家しかなかつた。多分私の話がウザイと思つてゐるんだろう。誤りすぎてしまつたとまた反省した。

「どうしても犯人が気になるか?」

杉が言つた。まだそっぽを向いてゐる。「うん」と私は頷く。

「ひとりでにシュークリームが消えるなんて、やつぱり理解できない

「そうか」

杉は少し間を置いたあと話し始めた。杉の推理を。

「俺たちは全員嘘はついていないんだ。だとするとシュークリー

ムを食べた奴は4人のほかにいる」

私は何も言わず聞いていた。杉は続ける。

「犯人はタエコだ」

「タエコ先生?!」

何も言わないぞ! と決めていたのに口がつい動いてしまつた。

「朝、ミカンが職員室のタエコに調理室の鍵をもらいに行つた。その時シュークリームのことを話して、私も食べたい、とか言われた

んじやないかな。それでタエコにあげた。タエコはオモケンの活動を知っているけど、多分俺が入っているとは思わなかつたんじやないかな」「

職員室でタエコ先生が杉に『誰先生？ 呼ぼうか？』と言つていた。あれは杉がキヨロキヨロしていたからじやなかつたんだ。

「だからシュークリームが三つになつても気にかけなかつた。最初から四つあつたシュークリームの一つは、自分のものだと思つていたのかもな」

「でもどうしてミカンは、あげませんって言えなかつたのかな」「私は思わず聞いてしまつた。どうしてミカンは断れなかつたのか。

「それは……俺、成績悪いだろ」

杉が言いにくそうに顔を歪ませて言つ。

「それは知つてる」

同じクラスの私は、担任に杉が何度も呼び出されていることを知つてゐる。

「だから俺が放課後遅くまで残つて遊んでいるつて、ミカンは言えなかつたんじやないかな」

「それは、杉くんのため？」

「さあ。次期部長の自分が、顧問に責められたくないつて気持ちかもしけねーけど」

杉は成績が悪い。その杉が放課後遊んでいることに、どうしてミカンが責められるのか。でもなんとなく分かる。次期部長のミカンはタエコ先生に期待されている。その期待を裏切れなかつた。それがどんな形でも。

「証拠なんてねーから、本当のことは分からぬけどな」

タエコ先生に聞けば真相は分かるだろう。だけど聞かない。だって杉は分かつてたのに、あの場でミカンに言わなかつたから。真相は分からぬまま、はつきりさせないのがミカンのため、なのかな。そう納得した。

「どうして、ミカンはそのことを私達に言つてくれなかつたのかな」

私が聞くと、杉は「さあ」と首をかしげた後、「でも、俺も言つてないこと、あるし」

「杉は何でもないことのように言つた。

「え、何?」

「俺が陽子を部室に一人だけにして、何処に行つてたかとか」「何処に行つてたの?」

そう言えば、陽子に疑惑が向いていたこともあって、そのことは聞いていなかつた。

「担任に、進路の紙出してた」「進路アンケートのプリント?」

先週進路指導の授業のとき配られた進路アンケート。確か期限は先週までだつたはず。

「決め切れなくて、担任に急かされてたから」「決められないって、進学か就職か丸つけるだけじゃん」

そう。進路アンケートは進路先の学校の名前を書かなくともよかつたから、私は迷うことなくその日に提出できたのだ。

「お前、進学だろ。なんで?」

杉が聞いてくる。

「え、みんな進学でしょ。それにまだ就職したくないし」

もう将来の進路を決めている人もいる。でも私にはまだ夢もないし、実際将来のビジョンがまったく浮かんでない。だけど進学することは当然のように感じていた。

「俺は俺が就職したくないのかも分からない。だから書けなかつた」「だからって、適当に丸すればよかつたのに」

それでもなくとも杉は成績悪くて、担任に目をつけられているの。杉は変なところで真面目だ。

「俺、信じれないんだよ。俺も俺の未来も」

「杉くん……」

私は、そんなこと考えたこともなかつた。将来は不安だけど、大丈夫だらうつて安易に考えてた。

そう言つと、「お前は強いんだよ」と笑われた。

でも私は何も考へないようにしているだけだ。迫り来る将来の選択を先伸ばしにしているだけ。将来をちゃんと見つめている杉の方が、強いんじやないの？。しかし杉は辛そうだつた。

「うちの学校、就職する奴いらないんだって。だから進学に丸ひとつで担任に言われた」

「じゃあ、やつぱり進学するんだ」

「今のところ」

な、誰にでも言つてないこの一つや二つはあるんだよ。ヒミカンを庇つて杉はわざと平気な顔で言つ。

だけどきっと自分の中で大きな問題だつたはずだ。私は話していく杉になにも言えなかつた。

でも確かにそうだ。きっと料理部の部長を狙つてたのに、なれなぐてオモケンの部長になつた陽子にだつて私達に話していなることはある。

私にある。例えばどうして私がこんなに杉の見ているものを追おつてしまつのか、とか。

少しして杉が「あーあ」と息を吐いた。

「勉強しなきやな。三年になつたら受験だ」

「そうだね」

思い出したくもない」とを言つられて、私は一気に気分が落ちる。

「そうしたら、オモケンにも来れなくなるな」

何でもないことのように杉は言つ。でも私はそんなの嫌だ。そう思つたけど言えなかつた。

もうすぐ駅が見えてくる。杉と私は家が反対方向なので駅のホー

ムでお別れだ。

「オモケンって好きだよ。私

「俺も」

杉は何を見るんだらう。真つ直ぐ前を向いている杉の目には、未来が見えているのだろうか。

「すごい好き」

私はもう一度言つ。言えない気持ちも葉に混ぜて。でも嘘も言つてない。

いつまでもなくならないで欲しい。私と陽子とミカンが作った居心地の良い世界。

だけどいつかは無くなっちゃうんだらう。三年になつて受験を意識し始めて、どんどん変わつてしまつ。杉が進路を進学と決めたよう、オモケンも変わらなくてはいけないかもしない。

嫌だなー。嫌だ。だけどどうすることも出来ない私は、このままの状態が長く続くことを祈つてしまつのだ。いいよ。私は現状で満足してる。

つかの間の幸せかもしれない。幸せじゃないのかもしれない。だけど、だけど私は今の幸せを長く感じていきたい。

駅の構内に入った。スイカで改札を抜け、杉とホームで別れると

き、私は言った。

「明日も来るでしょ。オモケン」

と杉は短く返事をして、開いた電車の扉に吸い込まれていった。振り返ることもなく。

扉が気の抜けた音を出して閉まる。閉まる。閉まる。

小さく去つて行く電車が見えなくなる前に私は、目の前の電車に乗つた。

杉の乗つた電車と反対方向へ、電車は小さく震えて発車した。

流れる町並みの向こうに狭い海が見える。もしかしたらミカンが私達に「タエコ先生が犯人だ」と言わなかつたのは、自分がシュークリームを食べたかつただけなのかもしない。クジだって正当だつたし。真実を言ってくれたら、絶対にシュークリーム半分あげたのに。私達を信じてなかつたのだろうか。

言わなきや分からないことだつてあるのにな。

信じてみたら、もつと簡単に平和に事件は事件になることなく、終わつたのだろうに。

どうしてミカンは信じてくれなかつたのかな。だけど、と思い直す。わたしだつてオモケンの友情を信じきれてないのかもしない。だからこのまま、変わらないでと願つてしまつ。どうして自分の将来は無責任に信じているのに、固いはずの友情は信じられないのだろう。

私はそんなことを思いつつ、自分の矛盾に気がつかないふりをして、目を閉じた。

(後書き)

読みでくださりありがとうございました。

ご感想、ご意見、ご指摘、宜しかつたらお願ひします。

特に推理もの初めてなので、推理、トリックに関してご意見頂ける
と嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2500r/>

シュークリーム殺人？

2011年3月3日02時32分発行